

海面が上昇する海進の結果、日本列島は入り江の多い島国になり、漁業が発達した。このことは、東京湾や大阪湾などに数多く残る（１）からわかる。（１）は縄文人が食べた貝の貝殻など、捨てたものが堆積して層をなした遺跡である。（２）土器や石器などの人工物も出土する。東京都の（３）遺跡はモースによって発掘調査され、近代考古学の始点となる遺跡である。

すぐれた石鏃の素材である和田峠（長野県）産の（４）が関東や東北の各地でみつかるなど、遠隔地との交易が行なわれるようになると、人びとの生活は定住生活へとかわっていった。縄文時代の人びとは、狩猟や漁労に便利で、湧水が求めやすい丘陵や台地の縁に数軒の（５）住居をつくって生活していた。各地に広がって集落の規模も大きくなり、墓地や祭りの場と思われる中央の広場を囲んで10軒ほどの（５）住居が丸くならぶ集落がつくられた。前期中頃から中期末には日本最大級の集落遺跡である青森県の（６）遺跡があった。

乳幼児の死亡率が高かったため縄文人の平均寿命は短かった。この時代には生活が自然の力に左右されることが大きかったので、あらゆる自然物や、自然現象に精霊をみとめ、崇拝する信仰＝（７）がさかんであった。人びとは、石棒・土面・土製耳飾り・玉類などの呪術のための道具を用いて災いを逃れ、自然の恵みを願う祭祀にたよることが多かった。また、出産やゆたかな自然の恵みを願って妊娠した女性をかたどった（８）や、成人に仲間入りするために前歯をぬく（９）の風習が広く行なわれていた。また、縄文時代には貧富の差がなかったため集落内に共同墓地がつくられ、死体は胎児のように折りまげられて埋葬される（10）が広く行なわれた。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10		